

つづさや
1週間ぶりミニ合同

after[🏠] school



R18

会えない間に
あなたの声を聴く

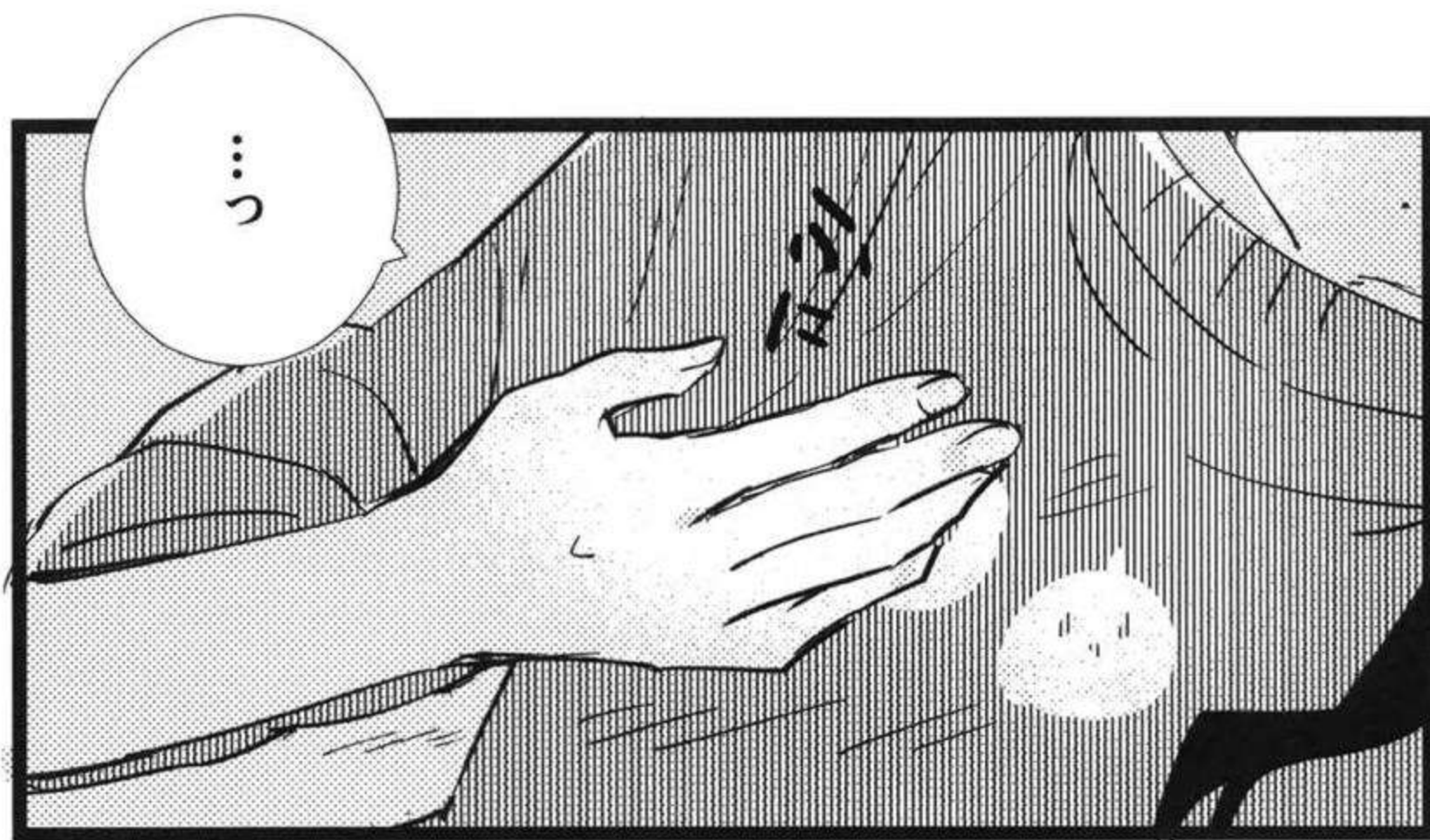
—っ

—

—

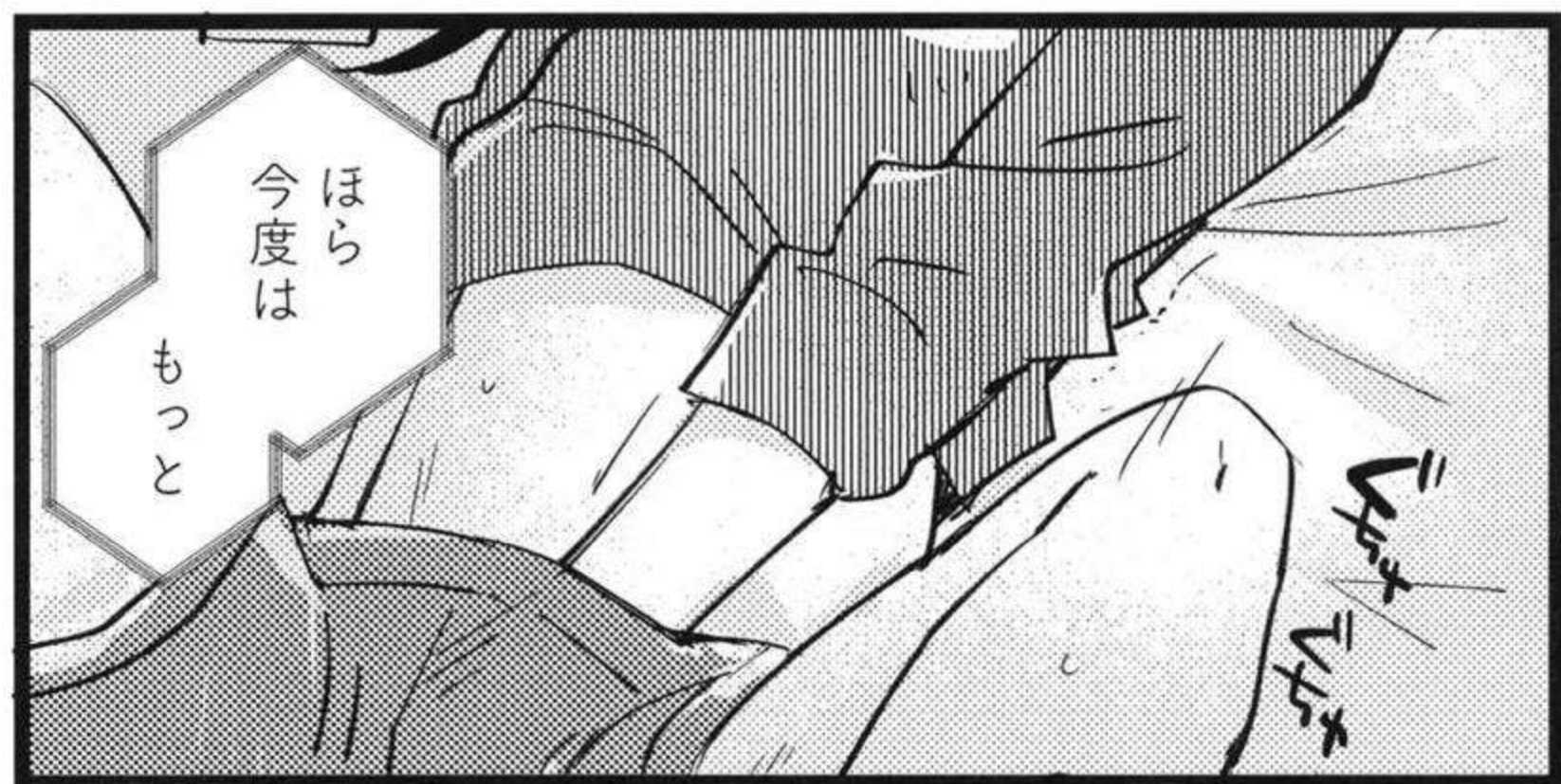
今回は
一週間—

綴理先輩…



さや

ちゃんとさわって
えらいね



ふっっ

「遠く近く」

環月紙袋

待ちわびた
ゴールデンウィーク

—っ！

。。

つつさや

1 週間ぶり ミニ合同

after school

R18

もくじ

03 環月紙袋 「遠く近く」

24 私雨 「週末ラブソディ」

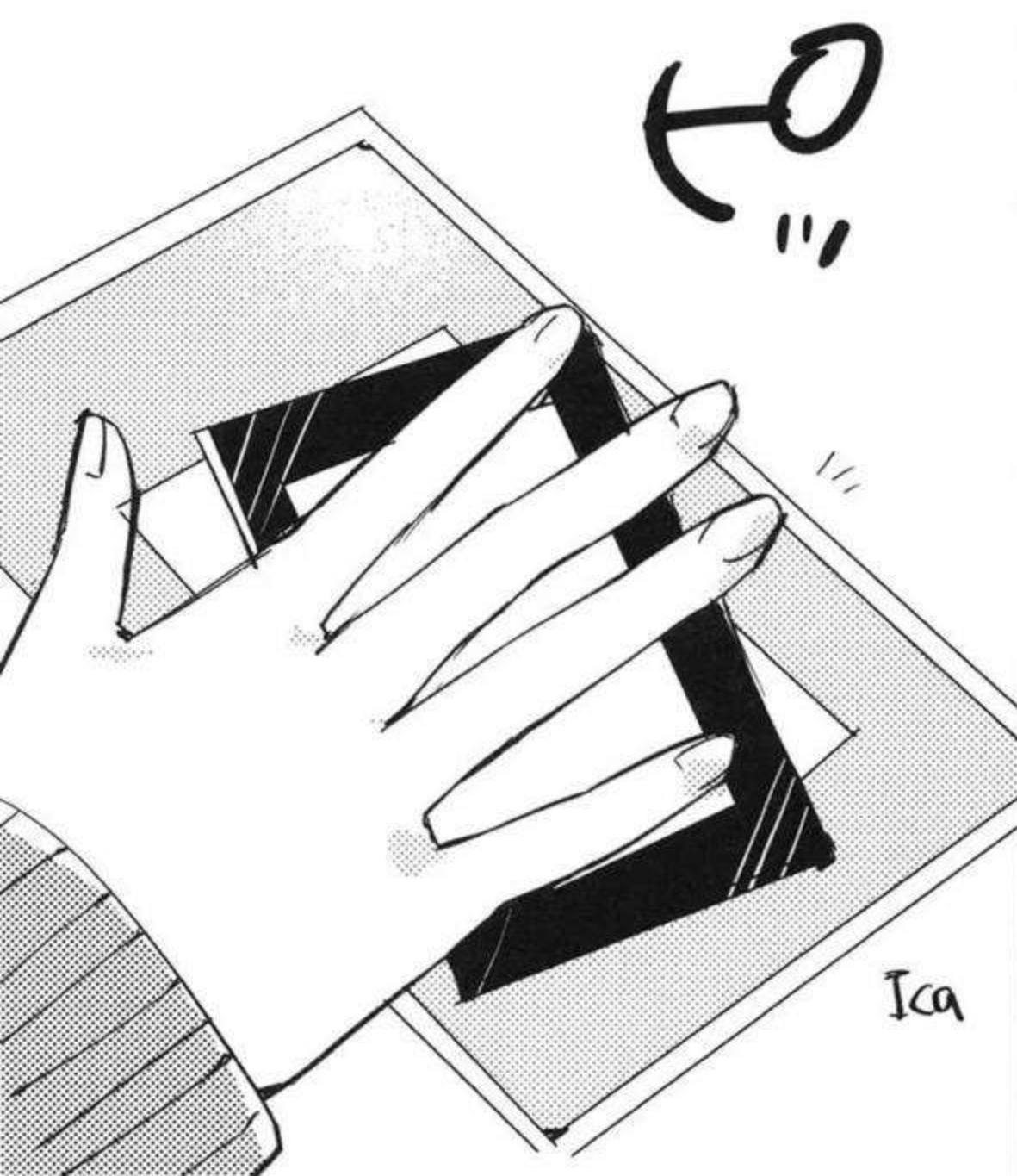
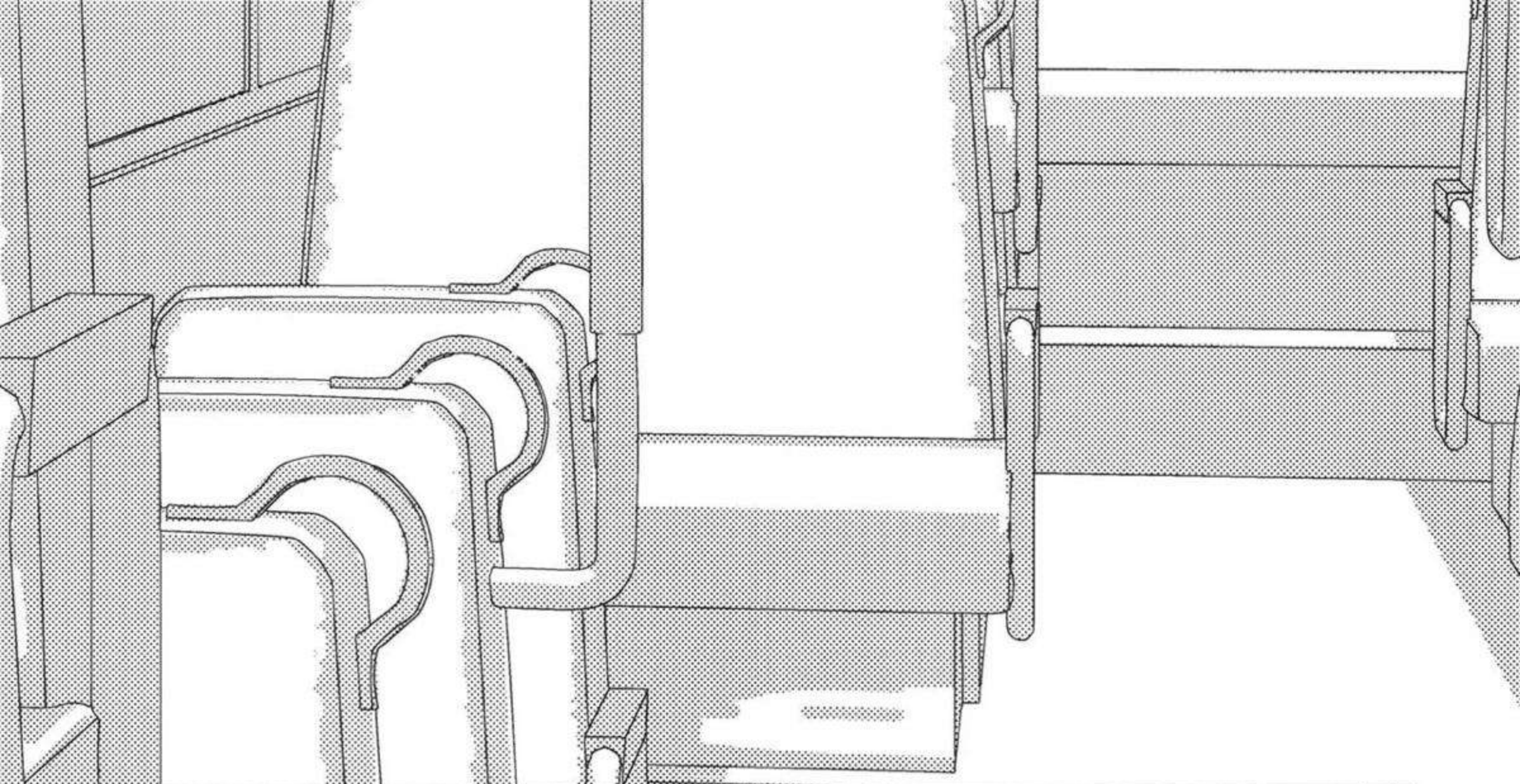
ごきげんヨーソロ、環月紙袋と申します。

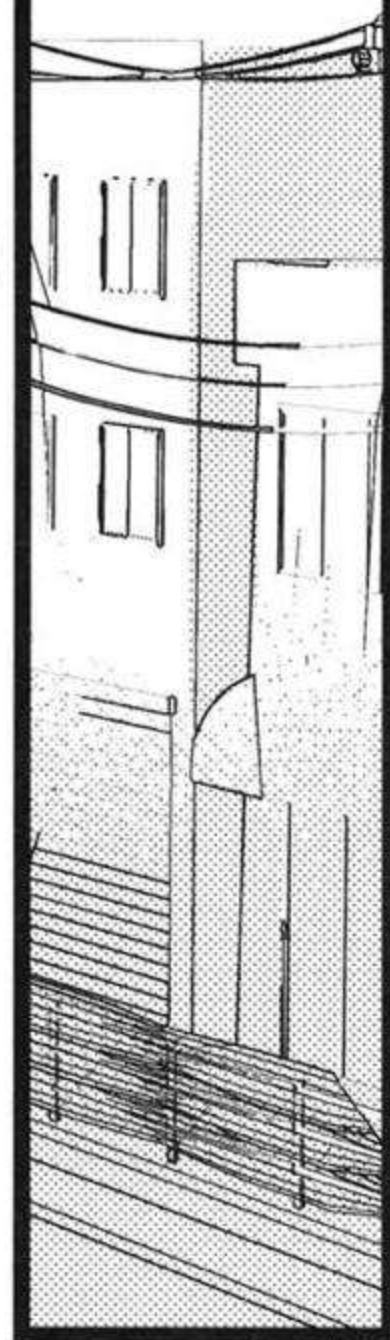
今回は私雨さんと「本気のKENZENなつつさやをやる」ミニ合同です。
そう、ちなみに。弊サークルではセンシティブのことをKENZENと呼んでいます。

これまで2年間、毎日おはようからおやすみまで時を過ごしてきた2人が、学期が上がって
生活環境が変わって……1週間ぶりの逢瀬となれば、それはもう。

私雨さんからは大変叡智の光に満ちた作品をいただきました。
最後までお楽しみいただけましたら幸いです。







さや

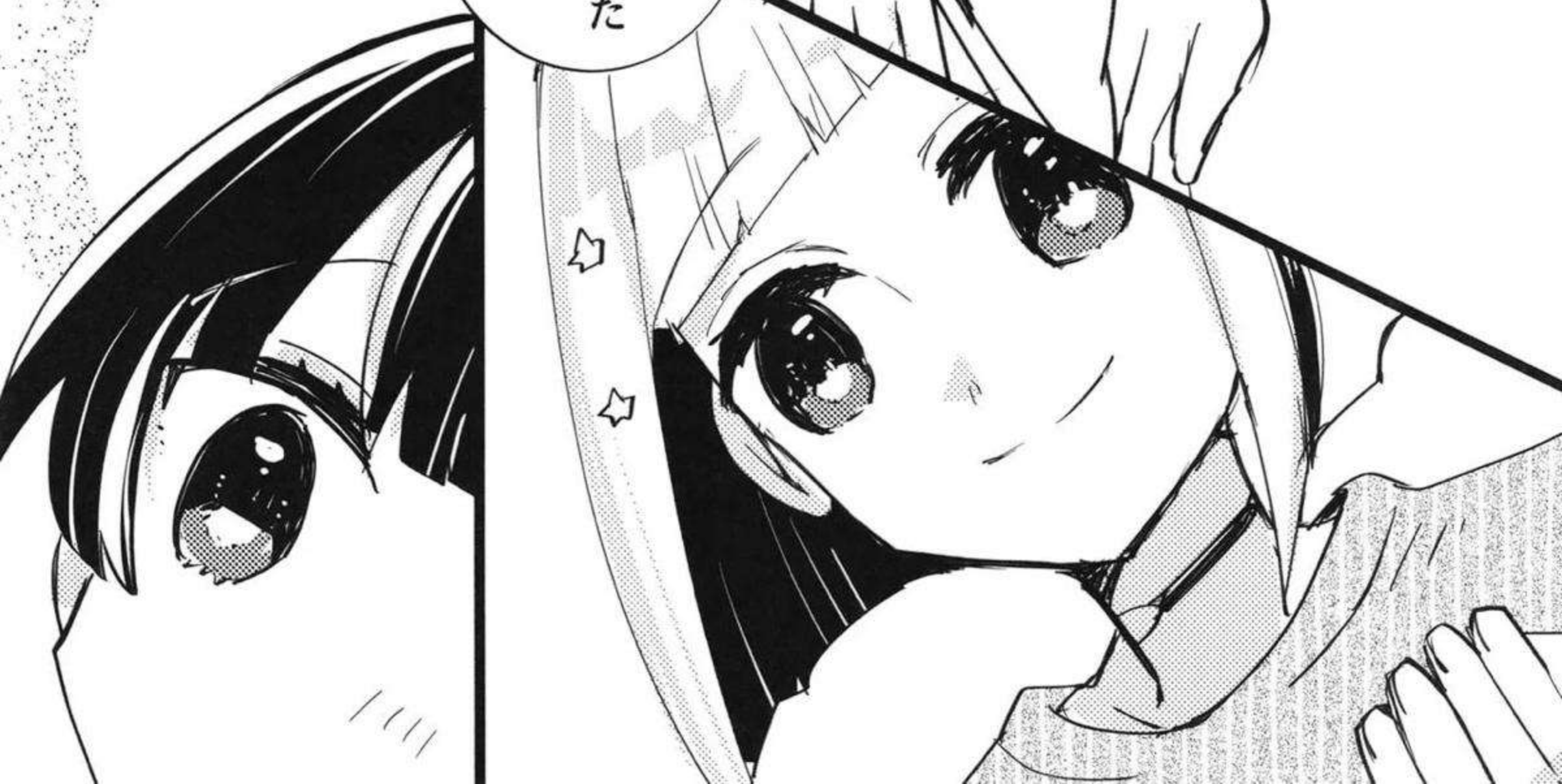
おうちで待っていて
くださってて
よかったのに

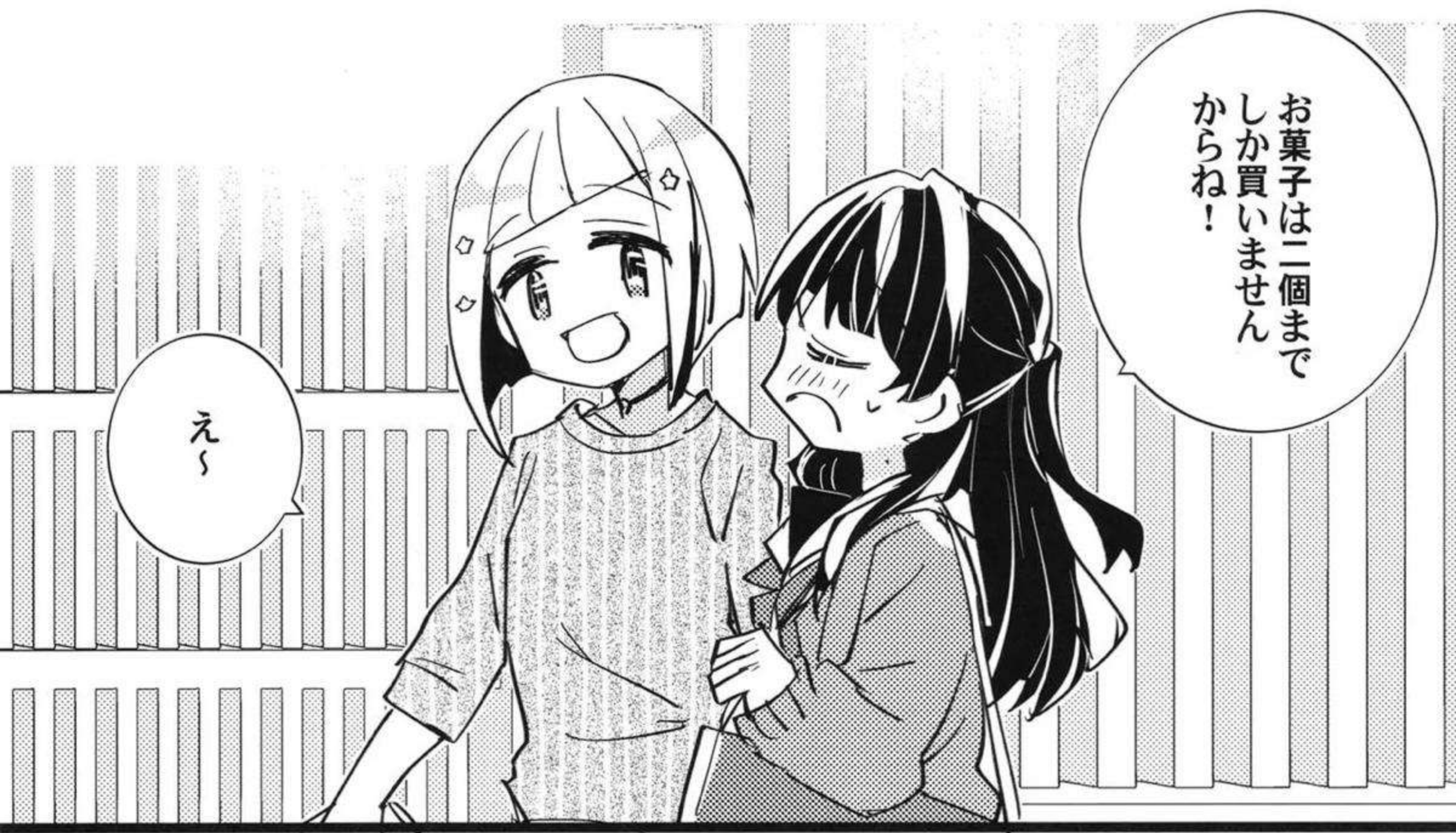


いっしょに

へっつ
もつよ

スーパー行きた
かったから





お菓子は二個まで
しか買いません
からね！

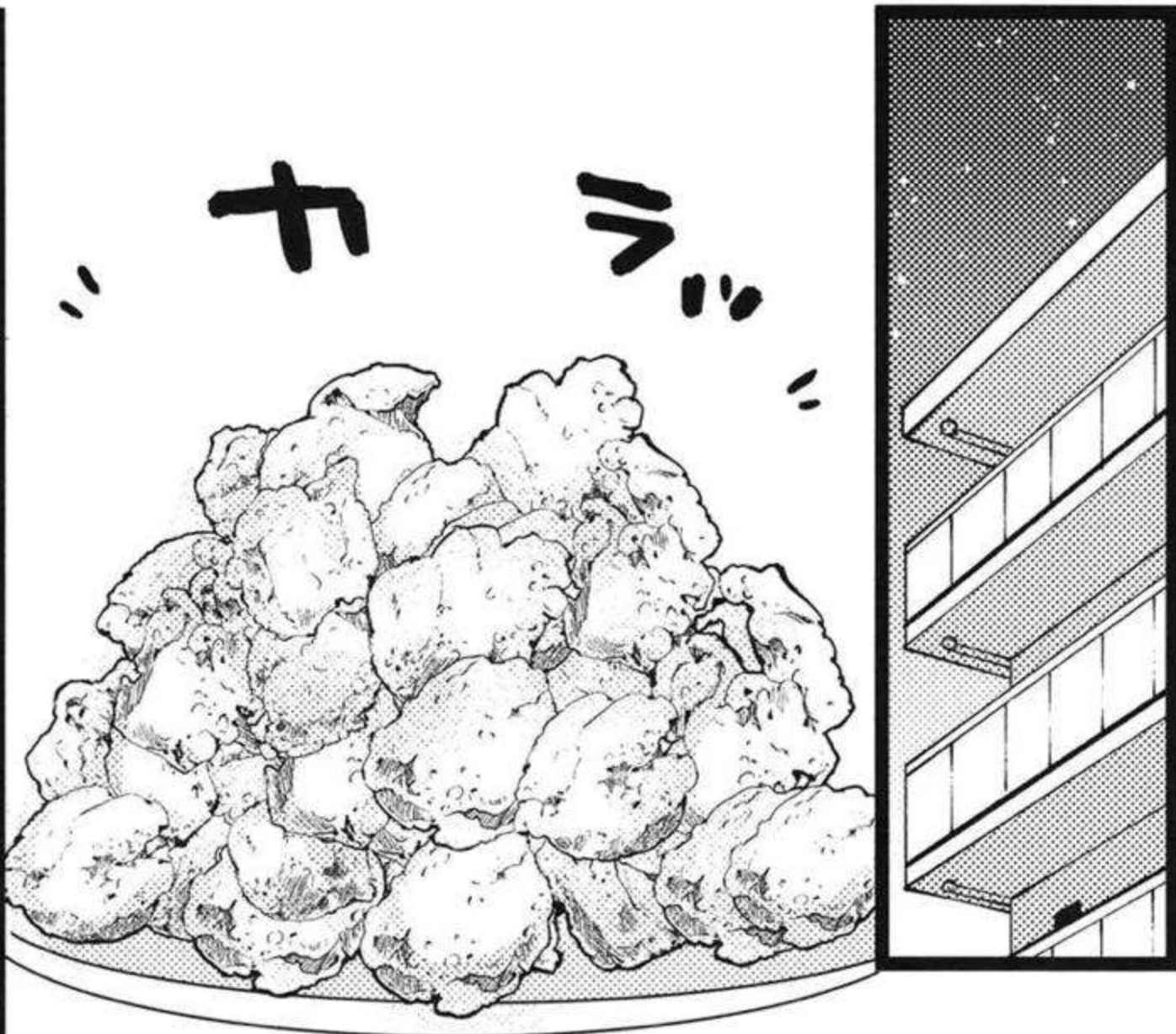
え



キラ



スッ





今困ってないか
とか

聞かないん
ですわね



……



さやが
話したいときに

聞きたい
かなって

うん

……今
頑張ってます



FesLIVE
本当によかった

ここで
みてるよ

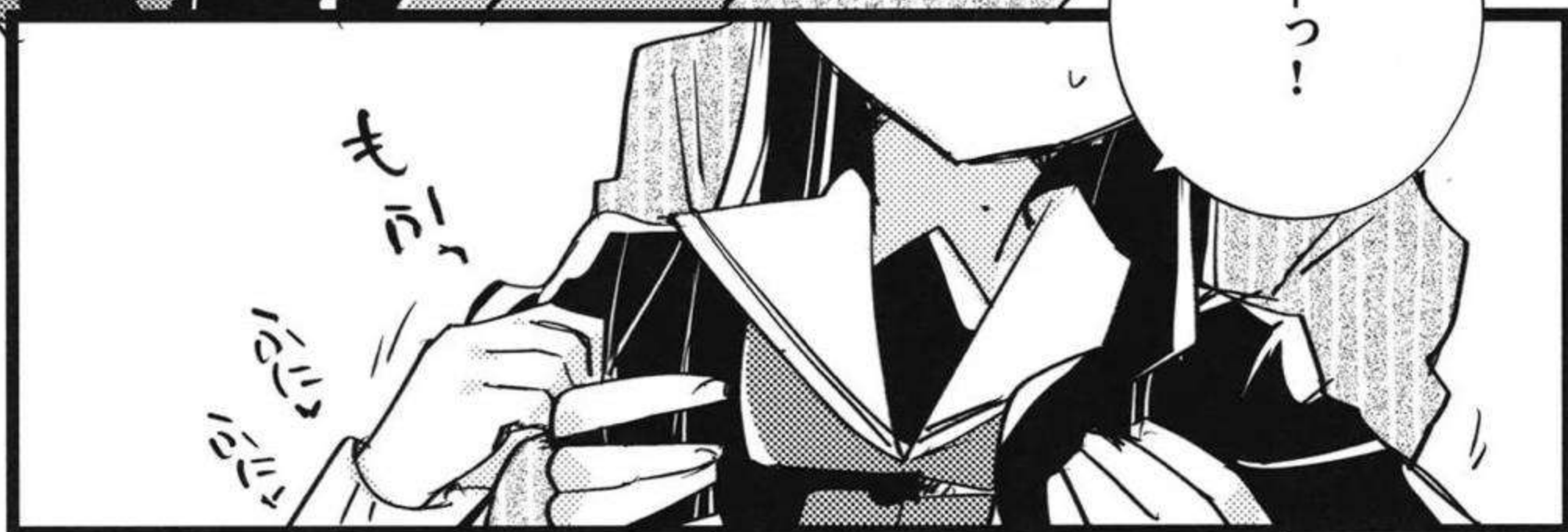


ぐ



それなら
もっと頑張れます



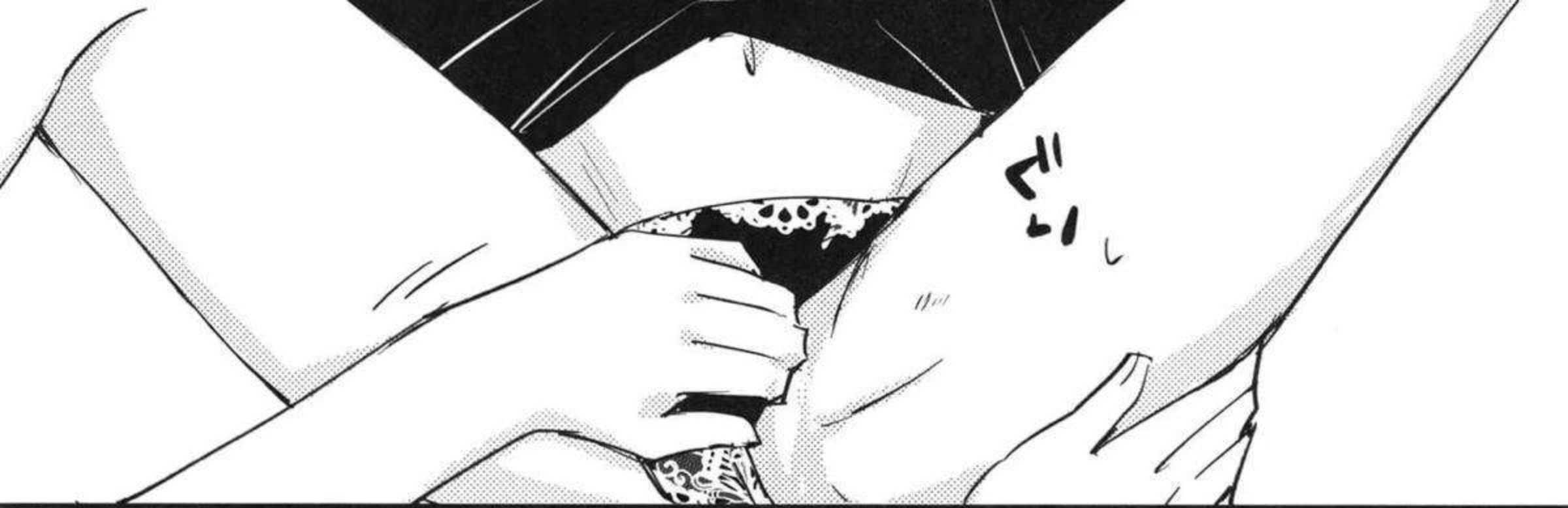




ありがとうございます
ございます...

下着
新しくした?

かわいい





でもごめん
脱がしちゃうね

綴理先輩…
キスして
ください…

ん…ん!

ドキドキ

サキ

ん

ハ

て

パパー

ドキ

ドキ

ドキ

パパー

ドキ

ドキ

—

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ

ドキ



あ

うわー

あ

うわー

わー

二本
すぎだよね？

はい…っ
はい…っ

綴理先輩…っ
ゆび二本
いきなり…っ

わー

わー

うわー









さや ボクはね

それぞれの場所で
がんばれるのは
すてきなこと
なんだって

最近
気がついたんだ

綴理先輩も

頑張ってるんだ

つづりせんぱい…

つづさや

1週間ぶりミニ合同

after school

R18

NEXT

24 私雨 「週末ラブソディ」



——華の金曜日。

昔は、いわゆる社会人の間で伝わる概念だと思っていた。確かにわたしたち学生だって土日は休みであるから金曜日というのはその前日に当たるありがたい日になるのかも知れない。だけどわたしにはスクールアイドルとしての練習があれば、そもそも寮生活ということで寝食を取り巻く場所と学校とはすぐ近く of 距離にある。だから今までそういったことには殊更無頓着ではあった。

それが変わったのは——わたしが三年生になってからだった。

週末ラプソディ

私雨

「さや、今日は甘えてるね」

綴理先輩がそう思う理由は、きっとわたしが座っているこの位置のせいだろう。

放課後、書き慣れた外泊届を出したわたしはそのまま真っ直ぐ綴理先輩のご実家へと向かった。インターホンを押して迎え入れてくれた先輩のご両親に『さやかちゃんならもうそのまま上がっていいよ』と言われて流石にそれはと固辞しながら慣れた足取りで綴理先輩のお部屋へと向かった。そして入るなりわたしは綴理先輩の両膝の間にへと腰を下ろす。

こうなったのには理由がある。なんせ前回会えたのは一

週間前。そう、一週間も会えていない。毎日同じ時間と空間を共有するのが当たり前だったわたしにとって、それはあまりにも長すぎる。

「たまには……いいじゃないですか」

背中に体重を預けると全身でそれを受け止められて、細くしなやかな両腕が伸びてわたしのお腹へと回される。背中に伝わる心音とぬくもり。わたしはこれが好きだった。一番身近にこの人を感じられるから。

首だけ振り返ると目の前に整った顔を見上げる。綴理先輩が卒業して、わたしが誰かを見上げるのはこうして二人で逢瀬を交わしているときだけのはずだった。

「どうかした、さや？」

わたしが毎日の様に先輩に思い焦がれてしまう理由は明白だった。新しく入部してくれた泉さんの存在だ。彼女のパフォーマンスは目を見張るものがあり、クラブとしての恩恵は計り知れないだろう。だけど、一つわたしにとっての懸念点があった。

泉さんの身長は——あまりにも綴理先輩と近すぎた。廊下ですれ違って挨拶をするとき。部室で些細な談笑を交わすとき。セラスさんの代わりにフォーメーションの練習に立ち会ったとき。見上げるたびに、どうしたって綴理先輩を思い出してしまうのだった。

「新しくセラスさんと泉さんが入部して……。その、心配になったりはしないですか？」

尋ねると一瞬驚いた顔をしたけど、すぐに元通りの微笑みを取り戻して「ボクはさやのことを信じてるよ？」と首を傾げた。

きっとそれはわたしを安心させる言葉で、事実わたしはそれに安堵もする。だけどそもそもわたしの目的は別のところにあった。

春になって、新しい出会いがあつて。綴理先輩に『もしかしたらわたしが誰かに盗られてしまうんじゃないか』と、少しくらい不安になってほしい。数年前の自分にはきっと想像もできなかった世界だけど、色恋にうつつを抜かす女子高生ならそれくらいの独占欲が芽生えて当然なのだということを今のわたしは知っている。

——そもそも、綴理先輩はどうなんだろう。

出合いの数で言えば大学に進学した綴理先輩の方が圧倒的に多いはずだった。すらりとした体躯にこの顔立ち。きっと大学の構内を歩けばそれはもう様になって、振り返らない人間のほうが少ないであろうことは優に想像できた。

「さや、やっぱり今日は変？」

不思議そうにわたしの顔色をうかがう視線から逃げるようにして目を背けると、わたしのボストンバッグがその先

に転がっていた。それに気づいた先輩はわたしがそのバッグを指し示しているものと誤解したのか「先に交換する？」と言って腰を上げる。

まったく人の気も知らないで……なんて言葉はもちろん口にできず、わたしも自分のバッグに手を伸ばした。中から取り出したのはナスのキャラクターがプリントされた一枚のTシャツ。綴理先輩と対面で向かい合うと両手でそれを手渡した。

「今日は……なすさんにしました」

「ボクはこの、グレーのやつ」

代わりに差し出されたのは、よく見慣れたレスン着代わりのパーカーだった。二年間、これを身にまとった先輩の隣で、何度も振り付けを練習したつけ。

受け取ったわたしは恥ずかしげもなくそれを顔に押し当てる。息を吸うと洗剤と柔軟剤の匂いに混ざって、わたしの一番好きな、馴染みの深い匂いを嗅ぎ当てる。綴理先輩がご実家に戻って、洗剤などの洗濯環境が変わったところでこの匂いだけは変わらない。

人から見れば随分と倒錯的な行為に映るだろう。わたしたちはこうして、一週間毎に互いの衣服を交換している。わたしはこうしてTシャツを差し出し、代わりに綴理先輩からパーカーを受け取っている。言い出したのは言わずも

がな、わたしからだ。綴理先輩のパーカーに袖を通せば自分から感じるこの人の匂い。代替品なのはわかってる。だけど、それでも心地の良い残滓にわたしはいくばくかの満足を得ることができた。

それに、当てつけや牽制の意味合いもあった。わたしと綴理先輩の関係が今も続いていることを蓮ノ空で見せつけ、そして先輩の大学ではきっと綴理先輩がTシャツの話題をきっかけにわたしの存在を匂わせているはずだった。

もう一度鼻で深呼吸をする。合わせて綴理先輩がわたしのシャツに鼻を押し当てて空気を取り込んだ。

「でも、すぐにボクの匂いになっちゃうんだ」

「ええ」

答えると綴理先輩はシャツを床において、膝立ちでわたしの前に陣取る。伸びてきた両腕に正面から抱きしめられて、そのままの形で身を委ねた。

「やっぱり、さやが一番さやの匂いがするね」

首筋に当たる吐息がくすぐったい。思わず身を振るけどそれを契機に身体を離されたらもったいない。伸びた指が髪をすくって、そこに顔を埋めた先輩がもう一度息を吸う。

「毎日この髪型を見られるみんなが羨ましいな」

「……夏は暑くなりますから、どうしようかと今悩み中なんです」

「この髪型なら大丈夫かな」

噛み合っていない会話。だけど、その意図は言うまでもなくわたしに通じていた。

身動きする音が微かにした。わたしが首筋を差し出すように動いて。先輩がそこに唇を這わせるように動いて。うなじの部分に柔らかな唇が触れると、湿った吐息が吹きかけられて、そして微かな負の圧力を感じる。皮膚を吸われているだけのはずが、まるでそこから快楽物質が広がっていくみたいに高揚感が高まっていった、先輩の袖をぎゅっと握りしめる。

唇が離れるリップ音とともに、今度はわたしが吐息をこぼした。

首の裏。わたしからは見えない位置。だけど、皮膚から伝わる火照りで確かにそこに痕が付いていることは確信が持てる。わたしが髪型を変えた理由の一つに、綴理先輩の『見えるところだとみんなに怒られちゃうね』という言葉があったということを、花帆さんや瑠璃乃さんが知ったらなんと言うだろうか。

——いや、もしかしたらもうバレているのかも知れない。「……見える場所でも、いいんですよ？」

隠されるべき秘密に少しさみしさを覚えてしまったと思うのは勘違いではない。綴理先輩がそこを選んだというこ

とはわたしを信頼してくれているということだった。けど、やっぱり数十キロの隔たりを持った先に恋人がいるというのだから、多少なりとも不安や嫉妬を抱いてほしいというのが恋する乙女の気持ち。現にわたしは綴理先輩に悪い虫がつかないかという不安を、花帆さんや瑠璃乃さんに何度もなだめられてしまっている。

「心配になったり……しませんか？」

「さやは、不安？ だったら——痕、付けてもいいよ」

いざ許可が下りるとそこでわたしは足踏みをしてしまう。もしかして無理をしているんじゃない？ 大学での生活に支障が出たら？ そう思って今までだって衣服に隠れる場所にしかわたしの痕跡は残してこなかった。躊躇うわたしの心中を見抜いたのか、あるいはしびれを切らしたのだろうか。綴理先輩は身体を離すとわたしを見て優しく目を細めた。

眼の前の綴理先輩の顔がゆっくりと近づいてくると、わたしの唇に蓋がされる。先に唇の隙間を作ったのはわたしの方で、綴理先輩はそれを同意と捉えたようで熱い粘膜をわたしの口内へと侵入させた。わたしのそれが迎え撃つようにして絡みつかせているのは、拒否や抵抗ではなく受け入れの証拠だった。呼吸するのを忘れたわたしのためなのか、やがて口内をまさぐる舌は抜き取られ、混ざりあった二人の唾液で濡れた唇だけをその場に残した。瑞々しく室

内灯を反射する先輩の唇をそうさせているのがわたし自身の体液なんだと思うと、体の奥底から微熱にも似た火照りを覚え始めてくる。

止まらなくなる。予兆も、気配も、わたしはとつくの昔に感じ取っていた。

「痕……見られちゃう」

「見られてもいいよ。さやがボクに期待されたいって思うのと同じ様に、ボクだってさやに求められたいって思ってるんだ」

わたしにとって都合の良い言質。だけど、それを聞ければ十分理性は取り除けられた。唇を先輩の喉元へと押し当てる。

「——大学には、何人くらいお友達がいるんですか？」

「いつも同じ講義に出る子と、お昼をよく一緒に食べる子と……三人くらい、かな？」

一瞬、わたしがむっと唇を結んだのはそれを押し当てられている綴理先輩にはわかったと思う。気を取り直し、狙いをつけていたそこをチュウチュウと音を立てて吸い上げる。わたしが吸い付くたびに先輩が微かに声を上げて、その嬌声が余計にわたしを興奮させる。

まずひとつ。そして今度は反対側にもっと深い紅色の痕を。そのまま舌を出してつーつと舐め上げながら顎の裏へ。

一際鮮やかな花を咲かせる。三つの花に彩られたその白い素肌に、わたしはさながら作品を完成させた芸術家のような満足感を覚えていた。

「今度はボクの番？」

それは確認ではなく、許可を得るための言葉だった。今からわたしの身体に起きる行為に身震いをして、顔を背けながら小さく呟く。

「……ベッドに」

返事もないままに首と膝の裏に手を差し入れられるとそのままふわりと身体が宙に浮かぶ。考えてみればわたしはここでは来賓だった。そして、毎日顔を合わせている大学でのお友達と比べれば、今はこうして週に一度だけの逢瀬が許されているという関係。こういう時くらい、お姫様として特別な待遇での扱いを求めるのも当然の資格というものだった。一番でありたい。唯一でありたい。それがただの願望ではなく事実わたしと綴理先輩との関係だとわかってはいても、もっとももっとと欲しくなってしまうのが恋愛なのだということを、わたしはもう知っている。

もう忘れてしまった実家のマットレスの弾力よりも余程身体に馴染んだ柔らかさに身体が弾み、次いでもう一度ベツドがぎしりと音を立てる。覆いかぶさる綴理先輩を求めするようにして腕を伸ばせば、深いキスがわたしのもとへと

降ってくる。まるで植物のツタのようにわたしたちの太ももが絡み合う。

わたしの唇から離れた先輩のそれが頬を伝って耳まで移動して、耳たぶを甘噛すると同時に舌先を耳の中へと侵入させる。下腹部に伸びてくる右手を左手で制しようとする行為に拒否の意思はなかった。初めて身体を重ね合わせたときは羞恥心から自然と伸びていたその行為も今は形骸化してしまっていて、単にそうした方が綴理先輩が熱く深くわたしを求めてくれるからだとかわかってるからに他ならなかった。

「つづ……り……せんぱっ……んっ」

「柔らかいよ、さや。耳たぶも、お腹も、太腿も。全部ふわふわだ」

体中を愛されて、もう触れられていない場所なんてないんじゃないかと錯覚しかけるものの、まだ残っている場所があるということはわたしの身体が一番良くわかっている。そして、それは綴理先輩だって。まるでお楽しみは最後まで取ってあったとでも言うかのように、そこへ指先が伸びていく。

「はあっ……っ」

断りもなく下着の隙間から指を差し込まれ、その先端が身体の内側にへと沈み込む。一瞬止まる先輩の動きに、わ

たしは声を聞いた気がする。

『もうこんなに濡れてるんだね』

『今日はいつもより早いね』

耳に届くその言葉が幻聴であることを祈りながら、わたしは眼前にある先輩の顔に目を向ける。視線がぶつかって、今すぐにも逃げ出したくなるのに、組み伏された身体では当然それもできず、よしんばできたところでわたしはそれを選ばないだろう。だけど、せめてまじまじとわたしの顔を、そうして愛おしそうな目で眺めるのはやめて欲しい。わたしの目尻に浮かんだ涙も、口の端から伸びている唾液の筋も、全部あなたにとろけさせられてしまっている証拠だというのはわかりきっている。

「すごくあついね」

それが「暑い」ではなく「熱い」だと理解したのは、差し込まれた指先がわたしの内壁を擦り上げる感覚に苦悶にも似た喘ぎを身体が上げたから。灼けるようなそこに先輩の指先が火傷をしないかと必死になって心配しているのはわたしがまだ理性を残しているということを証明しようとするためだった。

「今日はね、さやに良いものを用意しておいたんだ」

「はあ……はあ……いい……もの？」

抜き取られた指の感触に物足りなさとお預け感を覚えな

がら、荒い呼吸を整える。愛液に塗れた指先を舐めあげて綺麗にする先輩に首を傾げると、近くに置いてあったポーチから何かを取り出すのが見えた。

「さや、これなにか知ってる？」

手に握られていたそれは淡い水色をしたシリコンで包まれていて、その形は親指より二回りほど太いカプセルのような形をしていた。何も知らない無垢な女の子をとうに卒業していたわたしには、それが何なのか見当はついていない。先輩はわたしのごくりと息を呑む音を肯定と捉えたのか、嬉しそうに微笑みながらその先端に唇を押し当てて、ちらりと覗かせた舌で湿らせる。

「……いい？」

なんと答えれば良いのだろうか。そう考えあぐねている間に先輩がわたしの両膝を開いていくのを見て、自分が知らぬうちに頷いていたことを理解した。ぐしょぐしょになってしまっていた下着は取り除かれて、今そこを遮り隠すものはなにもない。顔を覗かせた入口にローターの冷たい感触が触れた。受け入れ慣れた先輩の指先とは異なる温度と質感に身体が力むと、綴理先輩が頭を撫でながら「力を抜いて」とおでこにキスを落としてくれる。

一度深呼吸をすると、それを待っていた綴理先輩がゆっくりと指先に力を込めた。

「んんっ……！ ふああっ……！」

予め綴理先輩の唾液で湿らせていたのもあるだろうか。それとも、そんなものは誤差の範囲に過ぎず、わたしから分泌されていた愛液の仕事量が大半なのだろうか。それは大きな抵抗も見せずにわたしの中へと沈み込んでいく。

「はああっ……ふとっ、いいっ……んっ」

「さやの中に入っていくよ。もう少し」

酸素を欲して口をパクパクさせると本当に欲しいものをあげると言わんばかりにその口が塞がれて口内を先輩の舌が舐めあげていく。わたしの方はわたしの方で、必要だったはずの呼吸なんてすぐに放棄して、ぐちゅぐちゅと音を立てて自分の中を蹂躪する先輩の舌に自身の舌を何度も絡みつけていく。

「さや偉いよ。ボクの、全部飲みこんじやった」

喋るときだけ離される唇に恋い焦がれて、上体をわずかに起こして追いかける。全部飲み込んだってどっちのことだろう？

この下腹部に感じる心地の良い圧迫感のこと？ それともさっきから何度喉を鳴らしても流し込まれてくる先輩の唾液のこと？

どっちだって構わない。わたしは綴理先輩の差し出すものをすべて受け入れているんだから。まだ、まだ足りない。

もっと、綴理先輩に――。

「さや、狭いね。ボクの指でもぎりぎりだから」

内側から身体を押し広げられる感触に息が絶え絶えになるも、綴理先輩のそれはその全身がわたしの中にすっぽりと収まったようだった。これでなんとか。そう思ったのに――。

「これ、めぐに教えてもらったやつなんだ。スマートフォンで操作できるんだって」

ああ、慈先輩ってば。余計なことを。

ただでさえはじめは隣りに座っているだけで満足できていた関係が、一度肌を重ね合わせてしまったことによつてずぶずぶと沼地にへと沈み込んでいったのだ。これ以上綴理先輩を知ってしまったら、わたしは本当にこの人から離れられなくなってしまうというのに。

今度一言、なにか苦言の一つでも告げねばと思ったところで、今の言葉にあった引掛かりに気がついた。

スマートフォンで操作？ 何を？

見れば綴理先輩はいつの間にかスマホを手に行っている。

どうして今スマホを弄る必要があるんだろう？

「さや」

優しく名前を呼ばれる。その顔はまるで生まれて初めて子猫という存在を目にした子どものようで――。

「あ、待って――あううっ！」

びくんと身体が跳ねる。内側から響く刺激に身体が反応を見せて自分でも笑ってしまいそうなほど素直に震える。いや、実際に膝と腰が笑っている。

「せんぱっ、今っ、イッて――ああうっ……ん！」

軽い絶頂にそれを気にも止めず与えられる振動。何が起きているのか脳が処理を行えず、もがくみたいに伸ばした腕はその手首を握られて、そのまま先輩の顔のそばへと誘導される。ぼやけた視界の中でその顔が愛おしそうに綻んだ。

「さや、これ良い？」

「つづっ、せんぱいっ……はあうっ！ これっ、これ、ダメなやつですっ、これえっ……あああっ！」

内側でぶるぶると震えて敏感なお腹の裏側へ絶え間なく与えられ続ける快楽に必死になって首を振って抵抗するけど、わたしを狂わせている張本人は悪びれた様子もなく呼吸困難に喘ぐこの唇を塞いだ。

「お腹あっ……ずっと、動いてえっ……はああうっ……んん！」

「これ、そんなに好きになっちゃった？ ボクのより、良い？」

答える前にまた唇を塞がれる。それと同時に伸ばされた

指先が、下腹部にある敏感な突起を指先でくりくりと回す。体内で震える刺激と同時に外側まで一緒に刺激されて耐えられるはずなんてないのに、綴理先輩はそれをわかった上で執拗にわたしを攻め立てる。眼前の瞳はわたしの反応を楽しむ心と自分自身の使う道具に対する嫉妬の心とで二分されているのか、これからの行動を決めかねているような複雑な色を重ね合わせていた。

「もっ、もっ……はあっ」

「もつとが……いい？」

「ちがつ、そういう意味じゃ——ああうっ……!!」

もつとゆっくりしてほしいと泣きじゃくる子どものようにして綴理先輩の身体に抱きついてシャツを握りしめる。しわができるのなんて知らない。わたしをこんな目に合わせているんだからそれくらいで文句を言われる筋合いはない。今の先輩は明らかにわたしの反応を楽しんでいるし、その視覚と聴覚でわたしから愉悦を享受しているのに違いがなかった。そういうモードが有るのか、綴理先輩が手元を操作すると内側で振動する玩具はブルブルと小さく激しく震え続けたかと思うと、一秒おきにズンズンと大きく奥を突くように震えたり、そのバリエーションを遺憾なく発揮してわたしの身体から色々な体液を流出させていく。シートに今だけの染みができているかなんて、もう考え

るだけ無駄なほどにわたしのそこからは綴理先輩に愛されている証拠が止めどなく溢れ出てしまっている。

「さやがどういうのが好きか、すぐ覚えちゃいそうだ」

綴理先輩がスマホを操作するたびに振動パターンが変化して、わたしの好きなところをわたしの好きな動き方で躊躇なく蹂躪していく。シリコンとモーターでできた玩具は先輩の操るままにわたしの弱点を的確に突いてこの身体を振らせていく。幾度となく重ね合わせたこの身体に何をすれば喜ぶのか、綴理先輩が知らないはずがないのだからそれは当然とも言えた。

「ひやあっ……はあうっ……ん、きゅう……けいっ……はあっ……!」

このままだと本当に窒息して死んじゃうと思って怖くなってイヤイヤするのに綴理先輩は許してくれなくって、そのまま後頭部に手を添えられてぎゅっと抱き寄せられる。鼻腔をくすぐる先輩の匂いが余計にわたしを興奮させて、もじもじと動かす内股はもう洪水のようにびっしりと濡れている。耐えなきや。また、来ちゃう。そう思って我慢するのにお腹の奥深くからふつふつとそれは上がってきて、それを察したのか綴理先輩はわたしの汗で張り付いた前髪をそつと指で梳く。

「さや。我慢しなくていいよ」

——そっか。良いんだ。

「つづ、せんぱっ……はあぁっ……来ちゃうっ、来ちゃうっ……んっ……あぁぁっ……！」

綴理先輩が気持ちよくしてくれてる。わたしのことを気持ちよくしようとしてくれる。だから別に我慢なんてしなくて良いんだって、今更ながらに気がついた。ぽっかりとだらしなく開いた口からはあはあと吐息をこぼしてその時が近いことを告げると、先輩は小さくうんと頷いた。

両腕を首に巻き付けて少しの隙間も許さないみたいにして身体を密着させるとじんじんとお腹の深いところから熱が登ってくる。

「良いよ、さや」

先輩が入口に指をあてがったと思うと、唸り声を上げる機械がぐいと奥に突き挿れられて。一番深いところにどすんと刺激が来たかと思うと、わたしの視界は瞬時に真っ白に染まる。

ガクガクと腰が震えて、お腹が痙攣して、自分の身体に起きた反応の余韻に頭がぼーっとのぼせていく。眼の前にある白い耳たぶに、わたしは無意識のうちに舌を這わせると、歯を立ててそこにささやかな抵抗の痕を付けたのだった——。

「あとで慈先輩にはクレームを付けないといけません」

心地よい腕枕の感触に甘えながら、わたしは唇を尖らせた。もちろん、慈先輩には感謝をしている。今日の経験は、あの人がいなければなかったものだし、綴理先輩と新しい形のスキシップを取ることができたのだから。だけど、加減というものがあるわけで。いつもより四割増しの心地よい疲労感がそれを如実にアピールしていた。

「良くなかった？」

「それはその……良かった……ですが」

改めて口にさせられると恥ずかしいことこの上ない。こうした道具に対しての感想だと、余計に恥ずかしさが膨らんで感じるのは気のせいだろうか。やっぱり慈先輩にはクレームだ。

「わたしは明日も先輩より早く起きるんですから、その……程々にしていただかないか」という言葉に大した説得力はない。確かにここ最近、土曜日の朝に綴理先輩の食事を作るのはわたしの仕事になっていた。と言っても、別に以前のように丸々全部わたしが受け持っているというわけではない。ただ、このご家庭の家事を手伝っている、というだけの話だった。いや、だけという語弊がある。だからこそ、わたしにとっては重要な意味を持つ行為なのだった。——最近、お義母さんに言われるんです。『うちの味を

覚えてきている”って」

これも口にするに恥ずかしい。だけど、同時に先輩にそれを意識してほしいとも思っていた。すっかり双方の両親の中で出来上がりつつあるこの既成事実というものを。それがただのわたしのぬか喜びではないということを。わたしのお姉ちゃんが一人張り切って応援してくれていると言っただけではないということ。

「さやの料理も教えてほしいって言ってたよ。蓮ノ空にいらるとき、ボクが毎日美味しく食べてるって言ったら」

「それは——なんだか方向が逆の気がします……」

嫁から姑への料理修行というのは、果たして存在するのだろうか。村野家からわたしを伝って、夕霧家へと伝わる家庭の味。——ああ、昔からわたしと綴理先輩の関係を面白おかしく冷やかしていたお姉ちゃんのはしゃぐ姿が目に見え浮かぶ。

恥ずかしくなっただけで視線を泳がせれば、枕元に転がる玩具に視線が向かった。先程までたっぷりわたしを愛してくれていたそれに複雑な感情を抱きながら手を伸ばして手中で弄ぶ。「同じもの……ないんですか？」

それはあくまで仕返しをしたいという意味での提案と願望であって、それ以上の意味合いは何も持っていなかった。なければそれで構わないし、むしろこんな危険なも

のが二つもあればそれはそれで大問題だとさえ思っている。

だけど、綴理先輩は小さく笑って身体を起こした。先ほどと同じポーチをゴソゴソと漁ると、同じ形をした淡い桃色のそれがその手に握られていた。

「これは、さやがボクにしてくれるときのやつ。スマホのアプリで遠くからでも使えるって」

ごくろり、生唾を飲み込んだ。眼の前にかざされたそれに。そして少し恥ずかしそうにその玩具で自身の口元を隠して目をそらす綴理先輩に。

「アプリ……入れる？」

「——ま、まあ……インストールはしますけどっ」

家に帰ってからのお楽しみが増えたと内心思いながらスマートフォンを操作すると、綴理先輩は嬉しそうに笑った。ああもうっ、慈先輩を放免しないといけなくなっちゃったじゃないですかあつ。

あまりにも用意周到で思わず心の中であのお節介な先輩に悪態をつく。この変に丁寧な根回しに、心当たりがないわけじゃなかった。以前瑠璃乃さんと慈先輩とで通話を行った際にわたしがこぼした『遠距離恋愛がづらい』という言葉。瑠璃乃さんからの『隔週で彼女のパーカーを着て帰って来る人に言われたくないよっ！』という非難の声に『確かに、瑠璃乃さんと慈先輩の方が物理的な距離は遙か

にあるし』とわたしは納得した。二人の前でわたしは随分と甘いわがままを言ってしまっただろうかと内省したのだけれど、きっとその時のやり取りから慈先輩なりにわたしたちのことを気遣ってくれていたのだろう。まさかその結果が行為の際に使う道具のアドバイスだとは思わなかったけど……。

「これはさやが持って帰って」と、先程たっぷりわたしは愛液を吸い取ったものを渡されて、恥ずかしさのあまりゴロンと寝返りを打って背を向ける。

「一人でしないでね」と背後からの追い打ちに思わずむせる。今のところ、寂しさに身を任せて一人でしてしまうことは少なかった。だけど、自室でこれを眼の前にして我慢がきくだろうか。

「——じゃあ、さみしくさせないでくださいね」

後ろから抱きしめられて耳にキスをされる。くすぐったさと多幸感に笑みをこぼすと、耳元で嬉しそうな吐息がこぼれてもう一度キスが落ちる。よくよく思い返せば、わたしの手に渡された一つだけではない。もう一つあるじゃないかと、その存在を思い出す。わたしだってされるだけではなく、ときに綴理先輩を愛したいとそう思っているんだから、有効活用しない手はない。それに恋人同士というのはやはり対等な立場でいるべきだと思うし、それはつまり

行為の際のイニシアチブにだって言えることのはずだった。寝返りを打って綴理先輩と向き合えば、身体を起こしてその華奢な体躯に覆いかぶさる。首筋を見下ろすと、先程わたしの付けた痕が三つ、確かにその存在を主張している。これは月曜、いや、火曜日くらいまでは残ってくれるかも知れない。

「——本当は、もっとお友達がいるんじゃないですか？」はじめきよんとしていた綴理先輩はその意図を理解したのか、わずかに頬をほころばせると「みんなと一緒にカラオケに行ったり、サークル活動してたりして、いっぱいいるかも知れない」と答えた。

「だったら——もっとわたしをアピールしないといけませんね」

玩具は家に帰ってからの楽しみ。というのはやっぱりなしだ。わたしは早速取り出したそれに舌を這わせると、綴理先輩を愛する準備を始めたのだった。

夜が来て 朝が来て 月の満ち欠けみたいに



これからもあなたと

お問い合わせ、ご意見などは
X(ツイッター)、pixivでのご確認、
またはメールへお送りください。

2025/05/18 発行

発行：紙袋Works/環月紙袋
印刷：太陽出版株式会社様

kamibukuro1@gmail.com
X(twitter)=kanduki_lily PixivID=1610290

無断転載・アップロードはご遠慮ください。



X(旧Twitter)



感想用マシュマロ
(匿名)

Kamibukuro_works presents
Lovelive! fan book
no.141